

その後、友人等とも連絡が取れ、それぞれに転校、復学ができ、今日の日を迎えることができた。厳しい戦後の体験は不動心を養えたと共に、平和、不戦への願いを新たにするものであります。

「思いでは雲に似てうたかたの夢と過ぎ去る」
戦後六十五年も過ぎると、印象的な出来事その他は忘却のかなたに失せてしまい、この「平和の礎」を執筆するに際して妹と長距離電話で話し合い、やっと当時のことを関係づけることができた。

幼い僕の敗戦見聞録

石川県 新矢 誠 二

はじめに

平成五（一九九三）年、僕が五十七歳になった年に、母が介護施設に入った。無口な母の寂しさを少しでも紛らわすことと、ぼけ防止の両方の効果を期待し、かつ僕自身の自分史作成のための裏付けを母から得ることも狙いとして週二回、見舞いの言葉を添えて満州時代からの思い出を語る形式の葉書を出すこととした。それは僕自身に対する義務として課し、約二年と少しの間続いた。それには、母を引きとって世話をすることができない親不孝を詫げる気持ちも含んでいた。この度、この葉書文を再編集して「平和の礎」に寄稿することにした。母は平成七年の秋に八十六歳の天寿を全うしたが、このことをきくと喜んでくれるものと思ひ、供養のつもりもあった。

一枚の葉書に書いたことを核として、一小節にまとめているので、断片的にならざるを得ないところがあるが、すべて当時国民学校三年生であった子供の目で見聞きしたことである。

平和を希求する願いの一助ともなれば、これに超した喜びはない。

一 二つの故郷

僕は満州生まれだ。敗戦時は国民学校の三年生、楽しかった幼年時代は忘れ難く、生まれ育った満州も故郷だ。心に深く残る土地も、みんな故郷と言えるだろう。

父母の故郷は石川県。旧国鉄北陸線的美川駅のプラットホームに初めて降りたのは、昭和二十一年（一九四六）年九月十三日の夕暮れであった。

この日が僕にとっての終戦記念日だ。引き揚げて来たことは電報で知らせておいたのに、それが届いていないのか、駅にはだれも出迎えがないと、父は不満を口にしていた。

たまたま故郷は秋祭りの最中で、家々の軒下に

つるされた提灯の明かりに歓迎されながら、叔母一家（父の妹）が住んでいる我が家まで歩いて行った。

満州では味わえなかった、故郷の美しい町並みの光景に感動した、引揚げの第一歩であった。

こうして、僕は二つの故郷を愛する人生を過ごす運命となった。

二 父の生い立ち

父の実家でもあるその家の屋根裏には、江戸時代の船箆箆や航海磁石や望遠鏡などがあった。祖先は加賀国石川郡吉村（現在の白山市美川地区）の所で、代々回船問屋を営み、日本海沿岸を北前船で貿易を行っていて相当の財を成していたが、時代と共に蒸気船の発達につれて家運も衰退し、父が小学生のころになると生活が苦しくなり、幾度か転居をせざるを得なくなったそうだ。

大正二（一九一三）年、小学校を卒業した父は、早々に敦賀の叔父を頼って、同年の秋には十一歳ながら単身で神戸港から北朝鮮の元山へ渡り、も

う一人の叔父を頼った。そこで家事の手伝いをしながら、尋常高等小学校に通った。大正八年からは、大連、新京（長春）、哈爾濱の商社に勤め、昭和二年二十五歳になって哈爾濱で独立し、貿易商を営んだ。

最近、未整理だった父の遺した書類の中から、引揚げ後に公的機関に提出した履歴書の写しを見つけた。それによると、父は明治三十五（一九〇二）年生まれで、二十八歳で結婚をしている。母、きよ子は明治四十二年に同郷の仏壇製造職人の娘として生まれ、新婚旅行を兼ねて哈爾濱に渡ったそうだ。

父は墓前の石の花立ての両側に、引揚げの年月日と朝鮮在住を含めて在滿三十五年を記し、祖先への帰国報告をしていた。哈爾濱には大正十四年から住んでいたようで、昭和七年の満州事変では、国際運輸義勇隊の一員となって哈爾濱防衛に従事した写真が、哈爾濱新聞社発行の観光案内写真のアルバムに載っていた。

僕は六人兄弟姉妹だが、みんな哈爾濱生まれである。僕の哈爾濱での思い出は、五歳ごろ東本願寺幼稚園に通っていたころだが、それも年々記憶が薄れている。

三 君は中国人！ に絶句

哈爾濱は、思い起こせばかつて帝政ロシアが、東洋のパリとして建設した華麗な都市であった。

昭和三十年、僕は高校三年生であったが、ある日学友と生まれ故郷の自慢話をしていた際に、哈爾濱のことを紹介した。すると、学友に「君！中国人？」と問い返されて愕然とした。その言葉に胸をえぐられる思いをし、以後「満州生まれ」を禁句としたが、子の親となり、生まれ故郷に誇りをもつ思い、禁句を解いた。就職の際、初めて自分の戸籍謄本を見て僕の歴史を知った。

「満州国哈爾濱市埠頭区工廠街四拾壹号ニ於テ出生、父小一郎届出、昭和拾壹年四月六日、在哈爾濱総領事 佐藤庄四郎受付 同年五月式拾八日送付入籍」父小一郎 母きよ子 式男出生 昭

和拾壹年四月壹日」記載あり、兄弟姉妹もみんな哈爾濱生まれで、家族八人全員そろって祖国に無事に引揚げて来られたのは今でも奇跡と思つてゐるが、それは父の秘められた行動の賜と感謝するのみである。戸籍謄本を見て、間違いなく僕は日本人である。友の一言、「君！ 中国人？」との屈辱の言葉は、貧乏の羞恥心よりも耐え難いひと言だった。

四 あの日あの時、どこでどうしてた！

昭和二十年八月十五日水曜日の正午は、在満国民学校の校庭に、夏休みにもかかわらず全学年の生徒が整列していた。その中に僕もいた。朝礼台で、校長先生が何かしゃべっている姿の記憶から始まる。やがて、校長先生が台を降りるとラジオ放送が流れた。「ざー・ざー」という雑音が大きくなって、非常に聞きにくい。三年生の僕には理解できない難しい言葉だ。低学年生のあちこちでくすくすと笑う声があると思うと、今度は先生たちと高学年生の方から、しくしくと泣く声が始めた。

やがて校庭に響くようになり、その異様な光景には驚いた。教室に入って担任の先生から放送の説明があつたが、日本が戦争に負けたという現実のことが分からぬまま、不吉な予感をいだきながら集団下校した。

僕の家は、桜国民学校の登校区域では一番遠いので、一人別れ二人別れして最後に一人で歩いてみると、すれ違った中国人はいつもと違う顔で、何か罵声を浴びたような気がした。怖くなり走り出すと中国人の幼児が追いかけて来て、小石を投げつけた。確かに昨日までとは違うと自分でも思い、家に戻った。それからしばらくは外出をひかえていたが、そのうちに子供は男狩りも女狩りも心配ないので、自由に学友と遊んでいたが、投石やいじめなどの記憶はない。

校庭でのラジオ放送が終戦の玉音放送と知つたのは、引揚げてから相当日数が経つてからだった。

五 銀行の扉よ！ 開けゴマ

学校で玉音放送を聞いて家に帰つたのは、午後

一時ごろだった。昼食を終わったところに、父が慌てふためきながら戻って来ると、いきなり僕を連れて家を飛び出した。行き先は銀行だった。

その日の銀行前の大通りは、ふだんと違って人影が無く異常な光景だった。道路上には、書類のような紙片が風で舞い上がっていた。真昼なのに異様なくらいに静寂で、死の街を思わせた。父は銀行封鎖の情報を耳にして、ここ満州国中央銀行哈爾濱支店に飛んで来たのだが、正面玄関の扉は固く閉ざされていた。父は扉を強く叩き大声で呼んだが、返答はない。通用門が開いていたので構内に入り、通用口の扉を根気よく幾度も叩き大声で呼んだが、なしのつぶて。他に出入口がないかと建物の周囲を探したが、駄目だった。父の狼狽する姿を初めて見て、国民学校三年生の僕も、ことの重大さに気付いた。父は構内から出てしばらく思案していたが、諦めて家路についた。商売をしているので、手持ち資金は多少はあったろうが、これから先のことを考えると銀行も郵便局も会社

も、封鎖されたらえらいことになるだろう。

六 公園にホームレス

しばらくは、現地人などによる暴動を耳にすることもなく不思議なくらい平穏で、治安は保たれていた。我が家の周辺は、主要道路が幾本も交差していて、小公園とか映画館とか、公共施設などがあった。終戦後数日するころから小公園付近にぼろぼろの服を着て、顔や体が異常に汚れ、靴らしき靴も履かず荷物も無い人が、幾日も満足な食べ物も食べていないようで、よろよろした足取りの人が出現し始めた。今まで見たこともないような異様な風体に、僕は驚き家に飛んで帰った。今で言うホームレスのような人だった。

翌日も翌々日も、うつろな目をした人が増えてきたが、最初に会った人はどこかに行ったのか見なくなつた。日本の警察か治安関係が保護したのかなと思つた。

これらの人は、国境近くの開拓団の人たちで、ソ連軍により着のみ着のまま追いついてられ、命

からがら南下して来た避難民の人たちで、どうしたことか家族連れの人は見あたらなかった。避難民の人たちがどこに行っただか、しばらくは僕にも分からなかった。

ハル濱在住の日本人も、明日の我が身が分からず、十分な援助はできなかったのだろう。

我が家の真ん前に憲兵隊の本部があったが、そこにソ連軍が進駐してくる前の出来事と思うと、多分八月下旬のことだったと記憶している。

七 女の兵隊

ハル濱の在留邦人は、巷の流言飛語に戦々恐々としていたが、我が家の前は憲兵隊本部なので平穏な日々が続いていて、治安は保たれていたようだった。

ソ連軍が進駐する前に、顔馴染みの同郷の憲兵さんが別れの挨拶に来て、憲兵隊の品物と分かるものは全て処分するように、と言いつ残して行った。今まで夕食などに招待するたびに、僕たちの喜ぶおいしい甘味品などをどかっと呼び連れて来ていたの

で、心配していたようだった。

道路の向かい側の、高い塀に囲まれた憲兵隊の練兵場が急に騒々しくなり、兵士の行き来が激しく、夜を徹して書類などを燃やし始めた。家の窓際の机に上って見ると、よく見えた。それから、我が家でも表通りの窓は雨戸を閉めて釘止めにし、新矢商店の看板も取外し、表玄関からは容易に出入りができないようにした。

ある日のこと、その練兵場に威儀を正した憲兵隊全員が整列した。しばらくして、左の方にある正門から見慣れぬトラックが入って来た。戦車も同伴しているようだった。幌付きトラックから、今まで見たことのない服装をした大柄な兵士が、大勢降りて来た。直感で「これがソ連兵だ！」と知った。巷間うわさで流れていた凶暴で無知な凶人兵と違って、秩序ある正規兵だった。

やがて日本軍憲兵隊の武装解除が終わり、今ソ連兵の乗って来たトラックに日本兵が乗せられて、どこかに走り去った。

それからは、ソ連兵の動向を見るのが僕の仕事になった。ある日、女の兵隊がいると言ってみんなに知らせると、家族も身を乗り出して見ていた。女の兵隊は、珍しいというよりも驚きであった。

八 野犬狩りならぬ男狩り

憲兵隊跡にソ連軍が進駐してから、避難民の姿をあまり見掛けなくなったが、その代わり白昼の街角での恐怖のニュースが伝わるようになり、僕も我が家の近くの小公園で、不思議な情景を目にした。

ソ連兵が、成壮年の日本人通行者を呼び止めては、幌付きの軍用トラックに乗せていた。連行される理由も知らされず、抵抗しようとする、マンドリン型の自動小銃に囲まれてしまう。このようなことが街の要所所で行われ、いずこへとなく運ばれて行った。各家にまで押し掛けて来て、連れて行くようになった。

煉瓦造りの我が家では、ちょっとやさそつとでは隠れ場所は作れない。最初はベチカの焚き口と考

えたが、体の大きい父は入れず、次に浴室の子ども二人と大人一人が入れる、蓋付きの和風箱型の浴槽の中に入ることを考えた。また押し入れの布団の後ろも考えたが、なかなかよい知恵は浮かばなかった。最後は、扉が開けられた陰に、とっさに入り込むという苦肉の策を考えた。今思えば笑い話だが、当時は予行演習までしたものだ。

長い間、外から見られない奥の方に隠れる生活をしていた父は青白い顔になり、ちょっとどこかにぶつかるとすぐに出血するようになり、止血にも時間がかかった。

不幸にして男狩りに遭遇した人は、シベリア送りとなり強制労働に従事させられ、大変苦勞をされたことを引揚げ後に知った。

郊外では、凶悪な囚人部隊によって乱暴狼藉をされたり、女狩りもあったとのことで、年ごろの女性はみんな剃髪し、胸はさらして巻いていたとのことだった。家の近くの小公園で、そんな悲劇があったなどとは知らずに、毎日眺めていた。

九 拳銃と商売

僕が五十歳のころ、故郷で義理の叔母が「満州では危ない商売をしていたそうかな？」と、どこから聞いたのか、裕福な生活を妬むかのような言い方で話し出した。そのような商売をしていれば、現地人から摘発されたりリンチを受けたりして、無事には帰国できないだろう。草葉の陰で、父はありもしない話にさぞ驚いていることだろう。

拳銃で思い出されることは、終戦直後にソ連軍が進駐して来る前のことだったか？ 記憶は定かでないが、現地人が警察官や治安関係者の家に踏み込んで来て、拳銃などを奪うという情報が流れた。父が僕だけを別室に呼んで、筆筒の奥深くから、立派な革ケース入りで肩掛け腰ベルトが一体になった拳銃と短刀を取り出し、「中国人の共同便所に投げ捨てろ」と言って手渡した。軍や警察に無縁な商売人である父が、物騒なものを隠し持っていたことに、子供心に引っ掛かった。内便所のある家の大人が、物を持って共同便所に行くの

は、ときがときだけに怪しまれるのは確かで、その辺りで現地人の子供とかくれんぼなどをして遊んでいた僕は、適任と思われたのである。人目のないころを見計らってそこに行き、一番奥の便つぼへ投げ捨て、どぼん！ という音を確かめて逃げ帰った。

父の老後に拳銃のことを尋ねると、哈爾濱市から競馬場の両替の仕事を頼まれたときに、護身用に拳銃を携行するようになると言われて買ったそうだ。公営施設の両替の仕事を頼まれるということは、一朝一夕で成し得るものではなく、長い間の商売の信用と、父の人格が絶大であることを意味していた。満州事変での義勇隊員としての記念写真には、拳銃の肩掛けベルト姿の父が写っている。

不景気の内地から、出稼ぎに多くの日本人が渡満していたが、親戚も父を頼ってうまい汁を吸おうとやって来たが、苦労人の父は丁稚小僧の仕事からさせるので、思惑の違った人は早々に日本に逃げ帰ったが、その人が拳銃携行姿の両替業の父

の写真を見ただけで言いふらしたのではないか。

十 乞食姿の憲兵さん

ハル濱の街は、一区画一通用口（木戸）が原則のようだった。中国人街だと、外壁は土の平屋で窓がなかったようで、木戸を潜ると共用の中庭があつて、各家の入口があつた。ロシア人街も理屈は同じで、三、四階のビルが外壁で、通用口の入口は一つで、その中庭にアパートなどが幾棟もあつた。大きい区画では、荷馬車やトラックが入る通用口（門）があつた。

僕の家は、幾つかの繁華街を結ぶ中継点で、区画の三面が大通りに面していて、商店と住居が併存している珍しい区画だった。商店には表と裏に玄関があり、表に玄関のない家は木戸を潜らねばならない。終戦後は「新矢商店」の看板を外し表玄関を閉鎖し、木戸を潜って広い中庭を通り、裏玄関から家に入りました。物騒なソ連軍による男狩りや、強盗などから守るため、裏玄関の出入りを厳しくした。忠臣蔵の合言葉ではないが、中庭

の部屋の窓ガラスを叩き、顔を確認してから裏玄関を開けていた。

ある日晩飯も終わり、僕は寝巻に着替えると、聞き慣れた声があった。居間に行くと、いつも手土産を持つて来た憲兵さんだった。軍服に軍刀を下げた威厳のある姿ではなく、開拓難民と同じようなぼろぼろの服の乞食姿だった。憲兵さんの話によると、憲兵隊本部からソ連軍の幌付トラックに乗せられてハル濱駅に、そこからすぐに有蓋貨車に詰め込まれた。このまま南下して日本に向かうのかと思っていたが、行先は怪しく、ソ連領に向かっていることが分かった。仲間と謀って列車がカーブで減速するのを見計らって、入口に座っている番兵二人を突き落として逃げ出したとのことだ。昼は畑に隠れ、日が暮れるとハル濱に向かっていたの逃避行を続け、軍服一式を、よれよれの野良着と交換してもらったとのことだった。我が家で久々に風呂に入り、腹いっぱい食べ、これから逃避行に必要なものを拝むようにして手にし、

再び闇の中に消えて行った。さすがに憲兵さんで、昭和二十年のうちに故郷の石川県根上町に帰国したそうだ。

十一 三身一体で通行手形とり

ソ連兵による男狩りも影を潜めた十月になると、昔風に言えば通行手形が発行されるという情報が流れた。

通行手形をもらうため、僕よりも地理に明るい兄が父の前を歩き、僕は父を尾行するように三身一体で居留民会に向かった。万が一父が逮捕されるようなことが起きたら、連行先を突き止めるのが、僕たちに課せられた任務だった。日本人経営の登喜和百貨店の前を通り、丸商百貨店を右折すると、見覚えのある赤十字病院の近くのビルの通口から中庭に出る。そこに「日本居留民会」の看板がある家に、父は姿を消した。一階なので、中庭から事務所の中の様子が分かる。商売人の父は、笑顔を絶やさずに長時間粘って話し合ったが、通行手形はもらえずに出て来た。

哈爾濱在住は、満州事変より前の大正十四年から、身元確実で公私共に実績と貢献度がありながら、通行手形は即座にももらえずに憤慨していた。三身一体の親衛隊で二、三回通って、やっと腕章をもらった。

十二 密告されてブタ箱へ

哈爾濱居留民会発行の身分証明書が出て、曲がりなりにも自由に外出できるようになった。支那服で変装せずに、父の友人が訪れて来て、将棋、花歌留多そして雑談などで楽しむことが目立って増えた。我が家は便利な所にあり、部屋も多かったので集まりやすく、まるでサロンのような雰囲気があった。僕も将棋を覚えて強くなり、僕を相手にして来る人もいたようだった。

そのような中で、戦中に威張っていた日本人が、いじめた中国人から密告されて中国警察に連行された話があった。僕でもいじめられている中国人を見てかわいそうだった。父が、中国人をいじめたり侮辱したりしたのは、一度も見たことがない。

正月や節句には、中国人店員を家に招待して、家族ぐるみで歓待していた。その父が、密告で警察に連行され所在不明になるという事態が起きた。親衛隊も役立たずだった。ロシア語が堪能な親戚の人と、店員だった中国人が東奔西走して所在を突き止め、一週間後ぐらいに釈放された。密告者は、以前に我が家に泥棒に入り、父の大声の寝言に驚いて腰を抜かして捕まった間抜けな中国人で、父は警察沙汰にせず店員として雇った者だった。大きな体の父だが、もしシベリアに連行され重労働に従事したならば、死んだかもしれないと述懐していた。帝国主義者として密告されたそうだ。

十三 地獄絵図の難民収容所

満ソ国境近くの開拓団などから、多くの人々が南を目指して着の身着のまま避難して来たが、哈爾濱では市街の日本人学校、日本人経営の百貨店などに収容されていたが、市街地ではあまり姿を見掛けなかった。

ある日、僕は父に連れられて、四階建ての登喜

和百貨店に行った。正面玄関は閉鎖されていて、建物横の従業員出入口から入った。急に暗い所に入ったのでよく見えなかったが、何かが動く気配があつて不気味だった。目が慣れてくるに従って、この世の恐ろしい光景が目に入ってきた。狭い階段に、足の踏み場も無く避難民がうずくまっていた。向こうも体の大きい父をソ連兵と思つたのか、残っている力を振りしぼって体を動かして道をあけている。父は二階に行くと、両手を口にあて「斉齊哈爾の○○さん！ いませんか！」と叫びながら、さらに三階、四階へと上がったが、父の呼びかけに反応は無かった。

この避難民の人たちを見て、食事はどうしているのか、排泄はどうしたのか、伝染病は流行っていないかといったのかなどと、今になって考えると身の毛がよだつ。その場には○○さんはいなかったが、無事に小松市に引き揚げたとのことだった。

十四 日本人も露天商

昭和二十一年になると、いつ日本に帰れるか分

からないので、哈爾濱在住の日本人も歩道に敷物を敷いて、自分の家にある日用雑貨を並べて売る人が目立ち始めた。やがて、日本人露天商の場所が公認されたらしい。我が家でも先々の生活の不安を考えて、みんなで露天商に出ることになり、役割分担を決めた。僕と兄は、いの一番にござを持つて家を出て、場所取りをした。父は櫛に荷物を積み込み、姉二人は凍結した道を櫛を引いた。父の采配で商品を並べ、売価を決めた。弟や妹は、母と一緒に昼の弁当を持って来た。帰りは皆一緒だった。毎日が暇で籠の鳥のような生活から、俄然忙しい生活となった。

哈爾濱生活は二十数年と長かったので、衣類、食器、雑貨、骨董品などは豊富で、売る品物には事を欠かなかつた。お洒落でハイカラな父の背広・防寒具などは、ソ連人に人気があった。事務所飾り棚にあつた「万葉集」全巻を初春用として陳列した。日本人ならいざ知らず、外国人には売れないと僕は思っていたが、中国人に買い手が

いた。父は流暢な中国語で笑い合いながら売値を交渉していたが、一冊不足のセットを指摘されて、父も根負けして売ってしまった。

春になると、路上の青空市場から難民収容所になつていた登喜和百貨店に変わった。そのころには、大勢いた開拓団の人はどこかに消えていた。

十五 山積みされた裸死体

満州の冬は早くて寒い。我が家のそばに、六、七本の道が交わっている所がある。そのど真ん中の市電停留所で、父と松花江に行くために電車を待っていたときのこと。向こうから二頭立ての荷馬車が近づいて来た。荷台はトラックの荷台のように囲いが無く、野菜や肥桶を運ぶ手荷車式だった。荷馬車が近づくと、異様なこん棒を積んでいるのが見えた。僕は「あっ！」と声を上げて驚いた。その瞬間に、父は僕の視線を塞ぐようにして立ちほだかつた。しかし、僕は見た。裸の人間の死体が、幾重にも山積みされていたのだ。満州の寒さで、それはかちかちと凍つて丸太のよう

になっていた。なぜ死体は裸なのか、子供なりに、衣類は伝染病防止で焼かれたと思った。しかし、大人になって追憶すると、着の身着のままの開拓団からの避難民は、暖のとれない収容所での寒さをしのぐことは大変なことである。生き延びるために、生きている者が死者の衣類を脱がせて着てしまった、と考えるも理屈はおおむね思った。

十六 三国一の紙幣

市街ではマンドリン型自動小銃で威嚇・乱射をしていたソ連兵の姿も消え、中国人警察官の姿が見えるようになり、治安が逐次回復していた。中国人露天商も一段と活気を呈して、精米を南京袋に詰め歩道に並べていたし、簡易食堂の屋台の数が増え、早朝から営業していた。

僕も商いを終えた帰り道で、珍しいアイスクリーム屋に出会った。暑い日中のことで、よく売れていた。父が値段を聞くと、売人は日本語で「日本の金なら一円、中国貨ならば二円、ソ連軍票ならば三円！」と、大声でまくし立てた。「戦い破

れても紙幣は三国一」とは不思議な話だが、引揚船に乗る葫蘆島まで日本紙幣は実力があつたようだ。

十七 引揚予行演習と最後の晩餐会

昭和二十一年八月、街で遊んでいると、日本に引き揚げる人たちが乗った荷馬車に出会った。私たちがいつになるかは分からないが準備に掛かり、子供六人はリュックサックに荷物を詰めて背負い、父の指揮で隊列を組み、「祖国引揚げの旅」に手落ちがないように、幾度も家の中で引揚予行演習を重ねた。

昭和二十一年九月七日、待ちに待った引揚日の知らせが入った。それも今年最後という幸運で、我が家も喜びに満ち準備にも熱が入り、一層慌ただしくなった。

かつて、母方の祖父が作ったという立派な仏壇は、店に長年勤めた中国人の第一番頭に譲り、その他の家財道具や日用品は近所の中国人に集まってもらい処分した。がらんとした我が家での最

後の晩餐会では、何を食べたか記憶が薄れていて
思い出せないが、近所の人たちが私たちの門出を
祝って差し入れてくれた、水餃子などを食べた、
と父は言っていた。水餃子は、日本で言うお雑煮
と同じような食べ物である。

翌朝、残った日用雑貨を処分し、登山に行くよ
うな姿で家を出た。その日は、哈爾濱駅に向かう
大通用門が特別に開けられていた。近所の現地の
人々に見送られた。中庭を通り木戸から出るとき
は家主の家の前を通るので、「ドラシイキー、ハ
ラシヨー！」と、元気な笑顔で握手を求められた
ことが懐かしく思い出される。

待機していた荷馬車に乗って、哈爾濱駅に向か
ったが、引揚げは一日延期となり、がっくりして
再び我が家に戻された。今年の引揚げは予行演習
で終わるのではないかと、一抹の不安を隠せなか
った。一日延期を知った近所の人たちが、寝具や
食事を差し入れてくれたのには驚き、感謝した。
敗戦で惨めな思いをしてきただけに、恩讐を越え

た隣人愛に涙が出た。これも、長年にわたり平等
に交際してきた父母の賜物であろう。

十八 哈爾濱駅での驚き

出発が一日延期になり、今日は間違いないとは
思ったが、一抹の不安もあって喜び浮かれる顔は
消えていた。上り坂の電車道を、二頭立ての荷馬
車の御者が右手に持った長い鞭で馬の尻を威勢よ
く叩き、大声で掛声を掛けている勢いに、僕らも
やっと元気が出てきた。坂の途中にある東本願寺
に別れを惜しんだ。

哈爾濱駅の正面玄関の前を、荷馬車はスピード
を落とさずに通過した。僕たちは、驚きの嬌声を
上げた。荷馬車は、貨物専用駅正門から貨車の止
まっている引込線の広場で止まった。次から次へ
とやって来た荷馬車の人たちで、広場は埋まって
しまった。

広場に敷かれたごぎの上に、荷物を全部並べた。
やがて、南京袋を持った中国人がぞろぞろとやっ
て来て、並べた荷物を物色し始めた。目をつけた

物を、問答無用とばかりに南京袋に放り込んだ。これが検閲なのであろうが、物色の基準はないようだった。長い時間の検閲が終わると、横に停車していた貨物列車に乗り込んだが、既に昼を過ぎていた。

十九 夜は満天の星空

貨物列車に乗ったが、なかなか出発する気配がなかったが、子供は貨車から勝手に出ることは禁じられていた。僕が持っていたトランプは、幸いに検閲に引っかからなかったので、退屈せずに楽しく過ごせた。夕食も、貨車の中でピンズを食べた。ピンズは、中国では携行食として重宝されている食べ物である。

やっと貨車は動き出し、みんなで歓声を上げた。貨車から降りていた人は、慌てて飛び乗り全員無事だった。そのうちに、昼間の疲れで知らぬ間にぐっすり寝込んでしまった。

荒々しく叩き起こされた。眠い目をこすりながら何事かと見回すと、列車は止まっていて、みん

なは真夜中のプラットホームに降りている。小さな駅で、周囲には家などはなかったように記憶している。駅前広場で、家族ごとに三々五々と陣取って満天の星空を眺めながら、祖国に向かっての引揚げの旅の第一夜を野宿で過ごした。雨が降らなかったことが幸いだった。匪賊・馬賊の来襲を心配して、寝ずの番をした人たちがいたらしいが、何事もなく無事に朝を迎えた。

この後、体験させられた地獄の行軍のことを知る由もなく、意気揚々と二日目の旅路へ出立した。

二十 レールが外されている！

寝惚けまなこで父の背を見ながら歩いた。不思議なことに、駅舎と反対に隊列が続いていた。しばらく歩くと、レールが外された砂利の線路床になった。レールは延々と外されているようだった。ここは、毛沢東の率いる八路軍と、蔣介石の国府軍との軍事境界線になっているとのことだ。

戦中に、満州に出征した叔父さんの陣中見舞いに牡丹江に寝台車で行ったことがあるので、満鉄

の駅間距離は非常に長いのは知っていた。九月と
いっても満州の残暑は厳しいので、大変な苦勞だ
った。しかし、ここで家族とはぐれたり、弱音を
吐いて置き去りにされたりしたら、それこそ生き
てはいけない。そのことは開拓団の難民の人々を
見ているだけに、痛いほど胸を刺す。

四年生の僕はまだ歩けるが、五歳の弟や四歳に
もならない妹は、それこそ大変な苦勞だったこと
と思う。妹を見ると小走りだったが、やがて体力
が尽きてスピードダウンした。哈爾濱で、近所に
中国人経営の理髪店があったが、そこに開拓団か
ら避難してきた体格の立派な青年を、父が身元保
証人となって住み込みで働かせた。その青年は、
我が家の一員として一緒に引揚げた。その青年が
自分のリュックサックの上に妹を乗せ、両手に弟
と妹のリュックサックを持って歩いた。

知らぬ間に、僕たちの列の横には八路軍の兵士
が規律正しく警備してくれていた。時折、線路脇
の高梁畑から片手でリュックサックを高く突き上

げ、奇声を上げて飛び出してくる兵隊がいた。僕
は父の背を見ながら必死に歩くのに精いっぱい、
その声を聞く余裕もなかった。

後で聞いたことだが、父親はシベリアに連行さ
れ、母親だけで幼児と赤ん坊を連れ、荷物を持っ
てみんなと遅れないように歩いていたが、体力の
限界で親子共々脱落してしまおうと、「荷物を捨て
るか、子を捨てるか」の二者択一の決断を迫られ
て、なけなしの荷物を捨てた。その荷物を拾った
兵隊が、喜びの声で仲間知らせていた奇声であ
ったとのこと。兄弟姉妹六人が、みんなそろって
無事に帰国できるようにと、父がその青年に同行
するように頼んだのであろう。「父よ！ 開拓団
の青年よ！ ありがとう！」

二十一 軍事境界線を南下

レールが外された砂利の線路床は、歩きにくか
った。子供の体力を考えて休み休み歩いたであ
ろうが、休憩をした覚えはない。前の方から「鉄橋
が見えたぞー」と言う声に、大人たちは歓声を上

げていた。その川が、当時の軍事境界線の松花江であったことを、後日知った。松花江は哈爾濱に流れていて、ロシア名のスンガリーで親しまれ、夏は川水浴、冬は渡し櫓遊覧、また繁華街のそばなので見物、散歩にと人気のあった河だった。ここは川幅が狭く、対岸がよく見えるので上流らしいが、鉄橋も破壊されていて、歩いては渡れない。壊された鉄橋の手前で曲がり、堤防上を歩いた。そこで再び検問があり、慣れた手つきで荷物を調べられた。終わって松花江に浮かぶ木造の渡し船に乗り込んだ。

やけに船底が深いなと思ったら、僕たちの頭の上に厚い板が覆われ、そこにもどかどかと後続の人たちが乗り込んで来た。この船は家畜運搬船で、父は家畜扱いにされていると言って憤慨し、珍しく感情をむき出しにして大声で怒鳴っていたが、横にいた人が「連行されますよ！」と注意したので、我に返り沈黙した。

松花江を渡った堤防上でも検問があるかと思っ

たが、そのまま鉄橋近くに止まっていた無蓋半囲いの貨物列車に乗せられた。国府中央軍もいたが、米軍兵士が目についた。今までの緊迫した雰囲気はなく、のんびりした感じだった。

間もなく新京に向かって出発し、新京には夜中に到着した。そこで一週間ばかり滞留した。

二十二 祖国への旅 果てしなく

新京からは無蓋・無囲いの貨車だ。荷台の外側は男性が互いに腕を組んで囲い代わりになった。途中から雨に見舞われ、腰を浮かしてしゃがみ大変な目に遭った。奉天（瀋陽）に着いたのは真夜中で、そのころには雨も上がっていた。今夜の宿は貨車だ。狭いので、貨車の下に潜り込んだ人もいた。

翌日、同じ貨車で出発したが、途中ではげた赤褐色の高原の低地で列車が止まり、動かなくなつた。このままだと馬賊が襲って来るのでは、と恐ろしかった。日本人機関手に、強制カンパを要求されたようだ。

午後から太陽の光も差し、赤い夕日の満州を堪能し、少しずつ祖国に近づきつつあることを信じながら、小雨の降り出した錦州に真夜中に着いた。どこでも真夜中に着くようになっていたようだ。

錦州では、収容所に収容された。とぼとぼと、疲れきった体を引きずるようにして歩いた。ここまでやっとたどり着いたのに、中国警察に連行される人がいた。僕は父のことが心配になっていた。明日は我が身という日々だった。

二十三 明日は船出の葫蘆島

錦州の収容所では、馬一頭の場合に人間が十二人ぐらい収容されて、そこで二週間ぐらい過ごした。明日は引揚船の出港する葫蘆島に行くという夜、各グループから一人ずつ整理整頓のために残れという命令があった。残れば次に帰れるという保証があるとはかぎらず、だれもが沈痛な顔をして、木偶での坊のごとくに立ったままだった。そのとき、父が保護者となり家族の一員となっていた。開拓団の青年が、一歩前に進み出て「自分が残り

ます！」と申し出た。この申し出に感謝して、泣き出した人もいた。世話をしていた父が、一番感激したのではなからうか。

青年に別れを告げて、貨物列車で葫蘆島に行き、棧橋の見える近くで検問ならぬDDTの消毒を受け、荷物共々真っ白になった。

昭和二十一年十月十三日に故郷の石川に着いた。錦州で別れた開拓団の青年からは、ひと月遅れで無事に帰国したという便りが静岡県からあった。これで、僕たちの祖国引揚げの旅に終わりを告げた。

二十四 貧乏が故に盗人扱い

父と兄は、親類回りをして炊事用具などを集めて来た。僕は、寒さに向かうので寝具などの運び屋にかり出された。僕は四年生、兄は一年遅れて五年生に、姉二人はそれぞれ旧制女学校の二年と四年に編入された。父は、故郷の美川駅から四つ先の県都の金沢に職探しに、姉は二つ先の松任駅に定期券で通学した。だが、定期券が買えるよう

な余裕のある生活ではなかったと思うが、そのころのことはよく分らない。母もときどき金沢に出掛けるので、切符を買うのが僕の仕事だった。そのころの切符は、列車ごとに販売枚数が決まっています。窓口で並んで買うのだが、日によって長蛇の列で買えぬときもあったが、終列車のあと駅員の温情にすぎり、子供の特権をふるに使うては求めて帰り、晩飯にありついた。

父の妹一家と同居していたので、就学前の幼い弟妹にも食事の差が分かる。今でも頭にこびりついているが、朝起きて台所を通って便所に行くとき、釜の底にそのままおこげが放置されているのを横目で見ていた。一度だけ白米のおこげを口にすることがあった。毎日食べている、水っぽい粥に生大根の千切りと葉っ葉の入ったご飯とは、雲泥の差だった。だが、だれも泣き言は言わなかった。

ある日、近所の小母さんが来て「お宅の坊やが、うちの子のおもちを盗んだ」と言って来た。弟

は、がんと盗つていないと主張し続けていた。数日後、見付かったと謝りに来たそうだ。

父は子供の教育上のことと、勤め先も無い町を見限ったのか、家を処分して金沢に引越した。昭和二十二年の夏休みで、故郷の生活は十カ月だった。

二十五 底抜け貧乏天国

引越先は、金沢市郊外野田山の麓に広がる、旧日本陸軍第九師団の兵舎跡に開設された。引揚者、戦災者のための、急造の住宅平和町であった。一世帯一部屋で、隣室とはベニヤ板一枚で仕切られていて話し声は筒抜けで、もちろん炊事・便所は共同だった。周囲は同じ境遇の者で、見栄も外聞もなく交際ができて、子供たちも底抜けの明るさで遊んでいた。

入居者がだんだんと増えてくると、子供たちの遊び場であった厩舎も住まいに改造された。錦州收容所での生活が思い出された。

僕は、土曜日の昼から近所のお婆さんと、炊事

用の薪や副食代わりの山菜取りに、近くの山に行
った。日曜は、近所の人たちと団体となって米の
買出しに行き、帰りは三三五五と交番のある村を
迂回して帰った。重荷が肩に食い込み、夏の田圃
道はつらかった。

当時は何もかも配給制で、品物を長屋の廊下に
並べてくじ引きをするのだが、まるでお祭りのよ
うな騒ぎだった。我が家では、くじ運の強い兄の
出番と決まっていた。

二十六 母は強し、検問強行突破

僕と母が、米の買出しの帰りに、汽車の棚に上
げていたリュックサックと手荷物の大ささで母が
検問にかかり、金沢駅前の交番に親子で連行され
た。警察官に促されて交番の中に入ろうとしたと
き、両手に持つ米袋の一つを建物の横に投げ捨て
た。僕は盗まれるのではないかと心配したが、全
部没収を免れる手段と感じた。買出米の重量測定
をされたが、規定量内で無罪放免となった。時間
稼ぎのためか、母はゆつくりと米をリュックサッ

クに入れながら、「外の荷物を持って先に行け！」
と僕の耳元でささやいた。僕のリュックサックは
お情けか検査されなかったもので、それを持って急
いで外に飛び出し、捨てた袋を持って停留所に向
かって逃げるように走った。生活のため火事場の
糞力を発揮したのか、重たくなかった。

父は米の検問で全て没収されて、照れ笑いしな
がら戻って来た。それも、隣町の交番でちよつと
裏道を遠回りすればよかったのだが、慣れてくる
とつい恐ろしさを忘れてしまうのだろう。まさに、
喉元過ぎれば熱さ忘れるのたぐいだ。

二十七 夢よ！ もう一度！

検問で米を没収されて、父は買出しを廃業した。
平和町にある唯一のマーケット内で、会社経営の
販売店に就職して、丁稚小僧になった。今から思
うと「満州の夢よもう一度」と、商才に長けた父
は遠大な計画を持って、顧客をつくるため顔を売
り出したようだ。

昭和二十三年の晩秋には、マーケット横の長屋

に引越した。そこは倉庫としていたようで、天井板が張られていなかった。積年の埃と蜘蛛の巣で、汚れ放題だった。隣室の話し声が聞こえないのが取柄であった。棚が四、五段もあって物の収容には好都合で、しかも、長屋の出入口とは別に直接屋外に出られる出入口もあり、店舗には最適であった。ただ、共同便所には四十メートルほどコンクリートの廊下を行かなければならないので、寒い冬の夜中はつらかった。

そのころは、長姉は織物工場へ、次姉は口減らしを兼ねて、岐阜の叔父を頼って紡績会社に勤めていた。貧乏ながら三食にありつける日々となり、夕食の焚き出しは僕の仕事で、そのうちに副食も作るようになった。主食は、麦飯粥に芋や菜っ葉入りが主だったが、僕は麦のにおいが嫌いで、さつま芋を常食にしていた。

昨年の夏の朝日新聞地方版に、「六十一年目の夏」と題して平和町のことが掲載された。昭和十二年、保育所誕生時の保母さんの談話に『平和

町は周囲の目には決して優しいものではなかった。汚い、貧乏町、乞食の集団など、差別的な言葉を受けていた。平和町に住んでいる、と職場などでは口に出せない……』とあった。

姉も結婚に差し支えると言っていたが、通勤の道で引揚者と知り合って、惚れられて結婚した。僕は、貧乏というよりも引揚者ということに負い目を持っていたが、熟年のころには自然消滅していた。

二十八 母が血を吐く

母は以前から胃が弱く、敗戦後の満州でも食事養生をしていたが、昭和二十四年正月過ぎに、遂に過労がたたり吐血した。大学病院からも見放されて、家に戻って来た。母三十九歳。僕が小学校六年の三学期だった。

祖国に引き揚げてから、母の偉大なる力で我が家の生活は支えられていた。この先どうなるのか心配になった。二月の寒い早朝、起こされた。母は、もう最期と悟っていて、台湾から引揚げてい

て金沢市内に住んでいる兄に会いたいということ
で、僕は伯父の家に行った。伯父の顔を見たら、
涙があふれて言葉にならなかった。

それから、平和町の赤十字病院の若い医師の、
献身的な治療と指導を受けた。輸血で血液型の同
じ人は僕と叔父の二人だけ。当時は高価な生卵を
飲んだが、輸血量が多かったのか学校を一週間休
んだ。

症状に一喜一憂しながら養生をして、母は退院
した。子供六人を育てなければと思う母の責任感
が良き治療になったのか、驚異的な早さで完治し
た。

母の手術は、昭和二十四年の早春だった。その
ころ県の施工で、汚い部屋に似合わぬような真新
しい天井が張られた。その後、大工をしている叔
父（母の弟）が、暇を見てはあちこち直してくれ
た。退院した母は、得意の和裁とその行商を主と
し、副業として家で食用油の量り売りを始めた。
結構繁盛し、僕や兄もこの仕事を手伝っていた。

二十九 一国一城の主に

商才に優れ、商魂たくましい父は、どのような
手段を以ってかは知らぬが、酒類販売の免許を取
得し、併せて調味料などを販売する新矢酒店を開
業した。昭和二十五年で父四十八歳、僕が中学二
年になっていた。

平和町周辺の裕福な農村の購買力を目当てにし
た。店のチラシを定期的にガリ版印刷し、兄と夜
道を配りに歩き、犬に追いかけてられて怖い目に遭
うこともよくあった。客から注文された洋酒一本
の仕入れには僕が行ったが、体よく断る問屋もあ
れば、心温まる応対をしてくれた問屋もあった。
さまざまであった。

中学では職業コースを選択したが、商売も順調
に伸びてきたので、三年の二学期から進学コース
に入れ代わって、工業高校に進学した。当時の高
校への進学率は、三十五パーセントぐらいだった。
昭和二十八年の秋には、隣のマーケットの空き
店舗の権利を購入し、翌年早々に開業するまで兄

弟三人でそこに泊まり込み、勉強に精を出した。

一級上の兄は、大学受験に失敗し家業を継いだ。僕は、高校三年になって大学受験を勧められたが、工業高校からは無理と判断し、社会人となった。

その年に周辺道筋の国有地の払下げがあり、待望の我が家の礎の工事にかかった。

三十 偉大なる父。慈愛に満ちた母

偉大なる父は、昭和五十八年の夏、八十二歳で天寿を全うした。慈愛に満ち、どんな困難にも耐え芯の強かった母は、平成七年の秋、八十六歳で天寿を全うした。

新矢酒店開業のころ、ラジオから流れた石川県出身の哲学者、暁鳥 敏の格言が身に染みて忘れられない。

○ 十億の人に 十億の母あらむも

我が母にまさる 母 ありなむ

○ ほろほろと泣く 山鳥の声

父かと思い 母かと思う

戦争、棄民、平和

大阪府 渡辺 糺

一 生い立ち

私は昭和六（一九三一）年九月一日。神戸市湊川町で生まれた。父は現在の電電公社勤務で、電話工事人であった。母は、私を生んでから産後の肥立ちが悪く、私が一歳になるのを待たずに死亡した。赤子の私は母の死も分からずに、よちよちとはっては家のあちこちで母を尋ね探しては泣いていたという。後年、多感な年ごろになって、この母の心情を思うにつけ、母は「私が死んだらこの子はつらいとき、悲しいとき、どのだれに向かって、何を訴えるのであろうか！」と若くして死を迎えた無念さ、心残りの深さはいかばかりであったであろうと察し、涙したものであった。

私が幼稚園に入るまで、父は懸命に私を育て、近所の人々の優しさにも恵まれ、すくすくと育つ